文革、そして自由化のなかで

中国文学最新事情

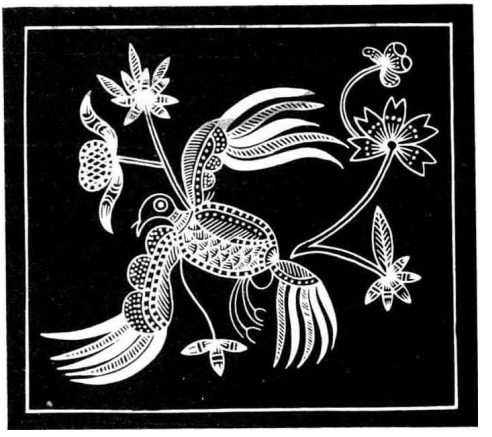
京大人文科学研究所長
竹内 実
萩野脩二 編著

サイマル出版会

中国文学最新事情

文革、そして自由化のなかで

京都大学教授
竹内実
三重大学教授
萩野脩二 編著



サイマル出版会

Shuji Hagino　　Minoru Takeuchi

中国文学最新事情

竹内 実・萩野脩 二編著

© Minoru Takeuchi and Shuji Hagino
THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載を禁ず

（発行所） 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫

東京都港区赤坂1-8 10（〒107）
電話(03)582-4221(代)／振替・東京4-52090番
印刷・製本 図書印刷株式会社

＊1987年2月 Printed in Japan ISBN4-377-40732-5

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国文学の新しい波——編著者まえがき

竹内　実
萩野脩二

中国の現代文学が、おもしろくなった。

題材は多様になり、対象に積極的に接するようになった。これは、「プロレタリア文化大革命」（以下文革と言う）を経たがゆえに、可能になったことだ。

一九四九年の中華人民共和国成立以後、中国の現代小説はどうであったか。

典型的パターンは次のようであった。善玉と悪玉が出てぎて、多少の紆余曲折を経て、善玉が悪をのりこえて、模範的な共産主義的人物像になる。善玉は「正面人物」と言われ、人びとが手本とすべき人物像なのである。

善玉の正しさを保証するものとして、「人民」が登場する。労働者・農民・兵士の「人民」が、善玉の言動を、作品中で肯定するのである。「人民」の認可による善玉、すなわち「正面人物」、すなわち共産主義的人物像の形象化が、文学の役割であった。

ただ、善玉がいつも事を成し遂げ、正しくて、模範的言辞を弄すると、読者から二歩も三歩も高み

に立つ、作為のめだつ人物となってしまう。紋切り型のセリフも多くなり、清潔で正確な模範的人物の、その非人間的なたたずまいに、人びとはしらけた気分を味わった。登場人物をちょっと見ただけで、もう筋がわかってしまうと、よく言われた。中国の現代文学はおもしろくない、とも。

ここには、労働者・農民・兵士たちに、精神的鼓舞を与えるのが文学の役割であるとする、毛沢東（マオツォートン）の『延安の文学芸術座談会における講話』（一九四二年。以下『文芸講話』と言う）の精神がひき継がれている。文学は政治に奉仕しなければならない。

この精神をいっそう推進したのが、一九六六年以後一〇年間にわたった文革である。

模範とすべき人物は英雄とみなされ、英雄の長所を強調し、きわだたせねばならない。悪玉すなわち「反面人物」は、いっそう矮小なものと扱われ、極端な場合には抹消されてしまった。

こうなると、無葛藤な宣伝のみが残ってしまうことになる。しらけた気分どころではなく、殺気だったムードが漂うと言ってもよかろう。

文学は政策に奉仕するものとなって、作家たちの世界観や方法などを拘束した。こういった文芸政策を推進したのが、江青（チャンチン）であり、彼女を含めた、政治局中央委員の王洪文（ワンホンウェン）、張春橋（チャンチュンチアオ）、姚文元（ヤオウェンユアン）の「四人組」であった。

七六年一〇月の「四人組」打倒という事件は、たんなる政治的事件ではない。作家たちのみならず、各階層の思考や行動を、文革の呪縛から解き放つものであった。当時は「第二の解放」と言った。一九四九年の政治的解放に対して、精神的解放を言ったのである。

*

文革を理解するとき、われわれ日本人が、かつての太平洋戦争下のある情況を媒介にして理解することは、それほど大きな間違いではないだろう。

冷静な判断や意見は、集団の利益を損なうものとして、「非国民」というレッテルのもとに圧殺された。隣組組長や町の分団長さんのファナチックな言動が集団の利益を守り、正しさを体現していた。彼らの初めて権力機構の一端に位置したことによる興奮が、集団ヒステリーの情況を形成していたのである。

敗戦後、日本では、自分たちがこういう情況の被害者であるばかりでなく、この情況に手を貸していたのだと内省する思考がなかったわけではない。

中国でも、作家たちは、文革にかかわった自らの位相の違いによって、それぞれの苦悩を結実させつつある。

この苦悩は切実である。

五〇から六〇歳代の作家には、すでに五七年の反右派闘争の際、右派分子として弾圧され迫害を受けた者が多い。文革では、すでに名誉回復がなされた者でも、「レッテルのはがれた右派」として、もう一度迫害された。しかし彼らは、そういう政治の奔流のなかでも、党や革命への愛ゆえに、自暴自棄に陥らず、自分の過程をふり返り、原点の確認につとめる。劉賓雁（リューピンイェン）は、あいかわらず、党の自浄作用を強く訴える。二二年間沈黙を強いられた李国文（リーグオウェン）は、革命根拠地であった老解放区に足を運ぶ。張賢亮（チャンシェンリアン）は、自分がなぜマルクス主義者になったかを克明に跡づける。そして王蒙（ワンモン）は、光があれば影もあることを否定しないが、むしろ光の方に、より多くの目を向けようとしている。

戴厚英（タイホウイン）は、自分が尖鋭な紅衛兵として、古いブルジョア思想を持った（と誤って判断した）人間を糾弾したがゆえに、人間性を欠いた思想の恐ろしさを訴える。

また、紅衛兵運動に参与した者たちは、自分を真の革命者に鍛練するために、辺鄙な山村や荒野へ開拓しにいった（上山下郷運動と言う）が、彼らは苛酷な自然条件下で、初めて自分の存在意義につ

いて内省する機会をえたと言っていい。張抗抗の抒情も、舒婷の詩も、対自的内省なくしてはえられないものだ。詩が、詩自体の内的論理を獲得している。

多くの作家たち、たとえば陸文夫、鄧友梅、蘇叔陽、劉心武などは、自分たちの街の両隣りに住む人物が、一定の情況下では、ある日とてつもない狂暴性を発揮することを知った。人間の不可思議さを知ったのである。

革命の推進者としての労働者・農民・兵士たちも、存在そのままで善であるわけはなく、正しいわけでもない。もともと、魯迅の小説『阿Q正伝』では、阿Qが殺されるのを舌なめずりして眺めていた人びとなのだ。「狼の目」をした存在であった。このことを、作家たちは骨身にしみるほど痛切に知ったにちがいない。

彼らは、明るく正しい「人民」ではない。社会を支えているが、ときには温情を示すし、ときには狂暴にもなる。こういう庶民とか市民といわれる人びとを、作家たちは、とらえ直している。

作家たちの視点は、もはや階級観点だけにとどまっていない。時間の軸も、たとえば清朝末期にまで遙かに拡大する。くりひろげる世界も、風俗をともにする集団や地域へと拡張する。伝統と言われる中国固有の文化をも、視野にとり入れる。

このように、あるがままの人間をあるがままに見直す姿勢が、文革を経て、それぞれの作家たちに切実なものとして生じている。対象へ積極的に関与しているのである。積極性は、とりわけ、作者の内的世界を再構築しようとする強い意欲にみられる。作家としての主体性が形成されているのである。中国の現代作家たちは、自分たちの内面に、文学としての自立的な論理を醸し出している。

このような主体性・自立性は、二度と文革をくり返すまいという社会的な公義（一九八一年六月の「歴史決議」がそれを代表する）によって、もはやおしとどめることのできない潮流となっている。

とはいえ、作家たちの欲求がそのまま表現できるほど、単純ではない。政治的圧力もかなりある。

*

文革が終焉して「第二の解放」をもたらしたとき、テレビが日本などの外国の都市生活を放映した。人びとは、中国の現状とあまりにも違う豊かさに驚愕した。この驚愕は、文革を二度とくり返してはならないという反省となって、以後の中国の政治路線「四つの現代化」(農業、工業、国防、科学技術の四つの分野を現代化すること)を決定した。物質文明の向上がはかられたのである。

一九八一年から、農業における生産責任制を採用し、八三年には、対外開放経済政策が採用されている。開放政策に付随して、欧米諸外国の「精神文明」が、あたかも日本の敗戦後の一時期のように、急激に、分析選択するいとまもなく入ってきた。若者たちは貪欲にどんどん受容した。

保守的な人びとが、反対や異議をとなえるのも当然のことであろう。

早くは、一九七八年に、「四人組」の犯罪行為や社会主義社会の悪弊を暴露する(こういう作品を傷痕文学と言った)ばかりでなく、社会主義を讃歌し、労働者・農民・兵士の徳を称えよという意見があった。これは、毛沢東の『文芸講話』の精神を守り、文芸に対する党の支配を強固にしようとするものであった。

また、白樺(バイホワ)『苦恋』(「十月」一九七九年九月発行)が映画化されたときは、八一年に「解放軍報」特約評論員が、この映画には、党と社会主義祖国に対する作者の怨念が表現されていて、非愛国的である、と批判した。

一九八三年には、社会主義下の疎外論を言い出した王若水(ワンルウオシュエ)や周揚(チョウヤン)などを、正統マルクス主義からはずれるものと批判し、戴厚英や張辛欣(チャンシンシン)の小説を「精神汚染」のものとして除去するよう叫んだ。

高行健(カオシンチェン)らが紹介移入したモダニズムの手法、および舒婷(シュイチンヤー)や北島(ベイダオ)、徐敬亜らの詩や詩論も、欧米のブ

ルジョア思想に拝跪したものとして批判された。

これに対して、鄧小平、胡耀邦による指導は、たとえば、白樺に自己批判させたり（八一年）、劉賓雁『もう一つの忠誠』の続編発行をおさえたり（八五年）するなど、しかるべき措置をとりつつ、文芸の問題は文芸にまかせるとして、政治闘争化することは避けてきた。

一九八四年一二月から八五年一月にかけて開かれた、中国作家協会第四回大会では、祝辞を述べた胡啓立が党中央を代表して、創作の自由を保証した。

しかし、文学は、政治指導者が創作の自由を保証すると言明すればおもしろくなる、というものではない。作品が現実との強い緊張感を失わず、積極的に現実にたちむかうものであるところにおもしろさがあろう。

やや年上の作家や紅衛兵世代と言われる若年の作家については、すでに述べたが、中年の世代にも、同じ傾向がみられる。

たとえば、張潔と遇羅錦は、前者が党員となり後者が亡命者となって、現在まるで正反対の方向を歩んでいるが、同じように、右派分子の子女という政治上の負荷に、離婚した女という道徳上の負荷を背負っている。張潔は、光がプリズムを通すと七色になる例をあげて、事象を多面的に見ることを主張している。

*

この本にとりあげたのは、巻末の評論の表題にいう「転形期」の作家と作品であり、いずれも第一級のものとしてわれわれが推すものである。ここでは、全体を次のように三つに分けた。

第一部「政治の奔流のなかで」は、一九五七年に右派分子となって以来、政治と苦闘をし続けてきた作家を中心とする。現代中国の良心の声を聞きとることが可能であろう。

第二部「新しい感性の目覚め」には、ヒューマニズムやモダニズムによって開花した、個性豊かな作家を集める。現在の抒情のあり方を感じとることができよう。

第三部は、日常的庶民の群像を描く作家や作品を集める。「街かどの囁き」とあるように、その多様な話題は、現在の中国そのものを、良くも悪くも反映している。

新しい文学の波は、理論面での劉再復（リューツァイフー）を含めて、今、大きなうねりをみせている。次にどのような波がくるか、まだ明確ではないにせよ、このうねりの意味は大きい。ただし、より若い作家たちの一部に、表面的な手法や珍奇な題材を追い求め、意匠に安住する傾向が見えないわけではない。

昨一九八六年一二月、学生のデモが全国的に発生した。これに関連して総書記の胡耀邦が「辞任」し、文学界では、本書でもとりあげた劉賓雁、評論家王若望（ワンルクオワン）が共産党から除名された。中国科学技術大学（安徽省合肥市）の副学長方励之（ファンリージ）も除名された。

また、政治の揺り戻しが襲いこようとしている。本書でとりあげた作家や作品の大多数は、この新しい政治の波の試練にさらされよう。読者とともに、深い関心をもって彼らの運命を注視したい。

*

なお、この本に収めた文章は、ほとんど霞山会発行の雑誌「東亜」に「中国の文学と人間」シリーズとして、一九八四年九月から八六年一二月まで巻末にあげた執筆者らが二五回にわたって連載したものである。さらに一篇は他誌に発表したもので、他の一篇は書き下ろしである。再掲載のものは、いずれも加筆した。霞山会の小川平四郎氏はじめ、江頭数馬氏、楢原茂樹氏のご配慮に感謝したい。

また、サイマル出版会の田村勝夫社長は、かねてから中国を理解するための数々の出版を企画・刊行されてきたが、今回も本書の出版を快くお引き受けくださった。編集担当の根尾ありささんの助力とあわせて心からお礼申しあげたい。

（一九八七年一月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

サイマル出版会のめざすもの

＊サイマル出版会は、激動する現代史の創造に読者とともに参加する姿勢で、国際的言論活動を展開するべく出発した。

＊思えば、人類は平和のために戦争を続け、世界は一つであることを願いながら分裂し続けてきた。科学の発展は、電子情報時代をもたらしたが、情報の同時性はまた単純同一反応性をも生み、新たな誤解に苦悩する結果となっている。

＊われわれは、こうした新たなる誤解による相剋の根をとり除くために、また世界の指導国家として再登場した日本の国際的資質を豊かにし、国内の諸課題を鋭角的にとらえ、国際間の理解を深めるための現実的歴史的素材を提供しようと志すものである。そして地球上のコミュニケーションを円滑にすることによって、人間の条件を回復し、世界が平和に一つに運営統合される事業に、言論活動によって寄与しようと念願するものである。

＊このささやかながらも高き理想に精進せんとするわれわれに、幸いにして読者諸賢のご支援を期待してやまない。

（編著者紹介）

竹内実（たけうち みのる）　京都大学人文科学研究所教授・所長

1923年中国山東省に生まれる。49年京大文学部卒業後，東京大学文学部大学院修了。東京都立大，京大人文研助教授などを経て現職。現代中国研究の第一人者として活躍している。

著書に『友好は易く理解は難し』（サイマル出版会）『現代中国の文学　展開と論理』『中国への視角』『魯迅遠景』ほか，訳書に蘇叔陽『人間周恩来』（サイマル出版会）などがある。

萩野脩二（はぎの しゅうじ）　三重大学人文学部教授

1941年東京都生まれ。65年京都大学文学部卒業後，京大文学部大学院修了。共著書に『ひとびとの墓碑銘』，共訳書に『中国の一日』『魯迅全集9集外集拾遺』『毛沢東初期著作集 民衆の大連合』など。

連絡先・〒606 京都市左京区吉田神楽岡町70-2

目次

中国文学最新事情

中国文学の新しい波——編著者まえがき

I 政治の奔流のなかで

手錠をかけられた雷鋒＝**劉賓雁**……3
——『もう一つの忠誠』の衝撃

二二年間の沈黙の後に＝**李国文**……23
——『冬のなかの春』の寓意

文革の後遺症＝**劉心武**……41
——『鍾鼓楼』と教師魂

苦悩する知識人＝**張賢亮**……59
——『男の半分は女』に至る道

辺境の光と影＝**王蒙**……83
——『イリにて——うす灰色のひとみ』を読む

II 新しい感性の目覚め

人間性の回復を求めて＝**戴厚英**……103
——『ああ、人間！』をめぐって

醜いあひるの子の飛翔＝**張　潔**……121
——『エメラルド』のめざすもの

北国の抒情＝**張抗抗**……139
——『夏』にみる青春

モダニズムの位相＝**高行健**……157
——『赤い嘴をしたハト』の手法

鼓浪嶼（コロンス）に咲く憂愁の花＝**舒　婷**……175
——『橡の木に』の理想

III 街かどの囁き

庶民の哀歓＝**陸文夫**……197
——『横丁の奥で』から

北京の風味＝**蘇叔陽**……215
——弱者への温かい目『阿呆の嫁とり』

戦時下の少年工＝**鄧友梅**……233
——『さらば、瀬戸内海』の追想
日常性の群像＝**張辛欣・桑曄**……251
——インタビュー『北京人』
残酷な季節＝**遇羅錦**……269
——『春の童話』の刻印
「転形期」の精神＝**結び**……295
——「堕落論」と「情欲論」
中国の新しい文学・略年表……315
邦訳書紹介……326

I

政治の奔流のなかで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c